

論 説

## 社会経済学の源流における視座と視界

——閑却された体系への一次接近——

工 藤 秀 明

「宇宙 [univers] においては未知の力が働いていて、諸々の恒星や原子を引きつけ、宇宙の機構全体を動かして続けている……。[同様に] ……人間社会の動き ……においては神のようなものが働いている……」

(Proudhon 1846, t.1, I : 訳書上巻13)<sup>1)</sup>

「アンチノミーは自然における引力と均衡の原理である。それゆえに、アンチノミーが人類における進歩と均衡の原理なのであって、経済科学の対象、それは正義である。」(ibid. t.2, 510 : 同下巻, 597)

「平等は、宇宙 [monde 天地] の法であるのと同じく、人類の法である。この法を外れては、人類に安定も平和も幸福も存在しない。というのは均衡が存在しないことになるからだ。」(Proudhon 1858, t.2, 69)

「自然においては全てのものはたえず振動すると同時に……均衡の法則に従っている。……見出された均衡の範式に従うことは、知的・道徳的存在としての人間の権利であり義務である。この均衡の責務こそ、私が

---

1) 原文ページはChez Guillaumin版のもの。訳文は一部変更。黒丸圏点および下線は引用者による強調、[ ]は補足、…は省略を示す。また以後の引用文中の太字は原文の大文字、白丸圏点は原文のイタリックをそれぞれ示す。

正義または経済における相互性と呼ぶものだ。」(ibid. 93)

「経済科学は……諸力および諸価値の均衡の科学以外のなにものでもない。」(ibid. 126)

「社会と宇宙 [univers] に共通するこの均衡の法則によってこそ、主観的法則と客観的法則は一致し、事物の本性に内在する正義——全ての超越的敬虔から解放された正義——は、私が外的な承認 [sanction externe] と呼ぶ最高の承認を見出すことになる。」(ibid. 132-133)

## 1. 社会経済学の源流へ

日本の経済学研究の世界では長く「近代経済学」系と「マルクス経済学」系の二つの系統に区分することが慣習化してきた。また経済学の歴史的研究を主課題とする経済学史学会においても、その大会報告などは「古典経済学」系とそれら二系統との大きく三つのグループに分類されプログラムが組まれることが長いあいだ当然のように行われていた。19世紀半ば以降に古典経済学に対する二種の批判的変革あるいは二様のパラダイム転換によって誕生した両系統が、そうした端緒以来一世紀余にわたって相互に対抗的・対立的に、あるいは別個独立に、さらに大勢としては無縁・没交渉に、それぞれ固有の発展を遂げてきたように了解されていたと言えるかもしれない。だがそのように両者を区分し疎隔視し無縁視することでかえって見過ごされてしまうものはないだろうか。むしろ両者に共通し共有されていたものを確認することから新たな展開の契機が得られるということはないだろうか。

「社会経済学」が学術用語として確立し広く普及することになった主要な導因の一つは、20世紀初頭にマックス・ウェーバーが編修責任者となって企画された『社会経済学講座 [Grundriss der Sozialökonomik]』

であろう。この講座への寄稿者の一人ヨーゼフ・シュンペーターは、経済理論、経済史、経済社会学、経済統計からなる相関的な経済学として社会経済学を提唱したが、その後さらに制度派経済学や経済人類学がこの範疇に入る開拓的分野と位置付けられるようになったし、近年では環境経済学、フェミニズム経済学など多様な先端的試みが「社会経済学」の新たな展開領域として捉えられるようになってきているようである<sup>2)</sup>。

しかしその源流を求めて遡れば、限界革命の一翼を担って「近代経済学」を成立させ、今日では一般均衡理論を創案しミクロ経済学を基礎づけたことのみで評価されがちなレオン・ワルラスが、自身終生目指していたのは、そうした純粋経済学そのものというよりもむしろそれを基礎とする「社会経済学」等でこそあったという事実に出会うことになる<sup>3)</sup>。また「マルクス経済学」に関しても、その原点に位置づけられるカール・マルクスは「経済学批判」をライフワークとし、それを“Kritik der politischen Oekonomie”と表記し続けたが、その内容を積極的に表現する——あるいはむしろ陰画的に読み取る、というべきかもしれない——とすればそれは「社会経済学」であり、したがってその後継を目指す学派は「政治経済学」よりも「社会経済学」と称することこそ相応しいとする意見が以前からあったし、近年ますます強まっているという事実がある<sup>4)</sup>。これらは、二つの系統の原点がともに社会経済学への志向性を有するものであり、むしろその源流に位置するものであったことを示して

2) 丸山1996, 225参照。

3) 近年の御崎加代子氏の精力的な研究1998, 2006, 2010等は、ワルラスの経済学体系の全体像と意義を蘇生させようとされており興味深い。なお御崎氏も触れておられるように、日本の数理経済学研究の先駆者の一人と目されながら惜しくも早世された手塚寿郎教授は、貴重歴大な「手塚文庫」を遺されたが、その文献収集の焦点の一つはここに当てられていたようである。坂田他編1966冒頭の「手塚寿郎教授の人と業績」とともに、「緑丘」編集部1967の諸稿からもそのことがうかがわれる。また立半雄彦1968も早くにそれと主題的に取り組まれている。

いるといえよう。

## 2. 二系統の原点において名指された論敵とその経済学上の主著

二系統の原点は、しかし社会経済学への志向性、その源流的な境位という点で共通しているだけではない。実は両系統の原点に位置づけられる上記の始祖たちは、ともに同時代のまったく同一の人物を「論敵」として名指しし、それへの批判ないし論駁をもって自己固有の経済学を形成し始める、いわば公的な出立宣言としているのである。つまり上記の始祖たちは下掲のように、それぞれ自らの公刊された経済学上の処女作ともいうべきものに、同じ人物の名前を副題として高々と掲げてそのことを明示しているのである。このことが物語っているのは、両始祖にとってはもちろん、かれらの時代と社会においてその人物がいかに大きな先行的存在であったかということでもあろう。

L. ワルラス『経済学と正義——P.J. プルードン氏の経済学説に関する批判的検討と反論』(Walras, L. 1860)

K. マルクス『哲学の貧困——プルードン氏の貧困の哲学に対する反駁』(Marx 1847)

両系統の始祖たちによって論敵として名指されたピエール＝ジョゼフ・プルードンは、日本では先駆的なアナキズム思想家、社会運動家として一般的にも知られてきたし、なかでも政治的分野の諸著作については、比較的早くから邦訳が進められ<sup>5)</sup>主に政治思想史研究の分野で論じられてきた。そして翻訳大国と称されることもあるほど正確な邦訳を

---

4) それは例えば、いわゆるマルクス経済学系の経済原論の教科書でも大野1998、大谷2001、宇仁他2004、八木2006、北村2009、角田2011をはじめ、「社会経済学」というタイトルを選択するものが増えていることにも現れていよう。

重視する国に相応しく、それらのいくつかは抄訳や全訳あるいはその改訳や新訳も重ねられてきたようである。ところがそれにもかかわらずブルードンの経済学上の主著とされるものについては、長く取り上げられること自体が多くはなかった<sup>6)</sup>し、邦訳は全く行われてこなかった。それが大部であることやテキストが難文であることもたしかに障壁となったにちがいない。しかし何よりも上述のように両系統の始祖たちによって明示的な批判と——「厳酷な」という形容が相応しいほど激しい——論駁の対象とされたこと自体が、その経済学上の主著があたかも取り組む価値のないものであるかのように見做される大きな誘因となり、あえてその障壁を乗り越えようと試みる意欲をそぐ原因となったということはないだろうか<sup>7)</sup>。そうした中でブルードンの思想に関心をもち共感を覚える人々にとっても、それはいわば敬して遠ざける対象とされてきたということはないだろうか。

だがその経済学上の主著『経済的諸矛盾の体系または貧困の哲学』

- 5) 初訳が出版された順序で示すと次のようになる。『所有とは何か』（初訳1921但し英訳書からの重訳、原著1840）、『労働者階級の政治的能力』（初訳1930、原著1865）、『十九世紀における革命の一般理念』（初訳1931、原著1851）、『労働権と財産権』（初訳1949、原著1848）、『連合の原理』（初訳1971【但し第1篇は前掲書に訳出・所収されている】、原著1863）、『一革命家の告白——二月革命史のために』（初訳2003、原著1849）。
- 6) 管見のかぎり主なものは坂本1970、佐藤1975、森川1979、津島1979、河野1987、藤田1993などであろう。なお本文に前述のように、むしろ政治思想史の領域においては予断の影響が相対的に少ないためか優れた研究が継続され蓄積されてきているようで、近年も森2014、金山2015等が、前期ブルードンの再検討の一環としてその経済学上の主著に関する興味深い論及を行っておられる。
- 7) 例えば日本におけるブルードン研究において一つの中核的役割を果たされた経済学者・河野健二氏も自らを顧みて次のように記されている。『『哲学の貧困』その他でマルクスがブルードンに投げつけた批判は痛烈であり、ブルードンを読むことなしにマルクスに没頭した大部分のマルクス主義者やマルクス研究者は、マルクスの断罪をそのまま肯定した。かつての私もまたそうであった』（河野1987、5）。ワルラスを始祖とする系統においてもおそらく同様であろう。

(Proudhon 1846) においては、実は、従来の主流的な政治経済学と諸々の社会主義とに対する両面批判が展開されながら、プルードン自らが目指すものが、他でもなく「社会経済学 [l'économie sociale]」であると明記され、くり返し論及されている。そうだとすればプルードンの思想に共感すると否とにかかわらず、また上述来の両系統のいずれかに与すると否とにもかかわらず、この主著を敬して遠ざけたままにして済ますわけにはいかないのではあるまいか<sup>8)</sup>。

またワルラスもマルクスも、自ら「科学的社会主義」者であることを任じ称していたことはよく知られている。だがかれら以前にそのように自任し自称したのが他ならぬプルードンであったことはそれほど語られてこなかった<sup>9)</sup>。そしてまたワルラスとマルクスがそれぞれに従来の主流的な政治経済学を批判しながら「社会経済学」を目指していたことも、冒頭に触れたように比較的よく知られている。だがかれら以前に、それを目指すことを明言し明記した——つまり彼らとの関係という意味では「原・社会経済学者」とも位置付けられうる——のが他ならぬプルードンであったことはあまり語られてこなかった。あるいは看過され等閑視されてきたというほうが正確かもしれない。

プルードンの著作は一般に大冊で判りづらいつの評價が多いが、就中

8) なおワルラス前掲書の副題からは、プルードンの経済学上の主著全体が批判的検討の俎上に載せられているような印象を受けることがありうるが、実際に取り上げられているのは、その主著の12年後に刊行された『革命と教会における正義』(Proudhon 1858)の一部であって、その主著そのものは——ここで自らが言及されている父オーギュスト・ワルラスは、それを讀んだ上で子息レオンのプルードン批判にさまざまな示唆・指示を与えたのだとしても——レオン・ワルラス自身によっては讀まれてさえないようである(佐藤1975, 314, 316)。またマルクスの批判はこの主著そのものを対象とはしているものの、取り上げられているのはそのごく一部にすぎない。そうだとすれば、そのような両始祖の批判的論及が誘因となってその主著が遠ざけられ等閑に付されたままに置かれるのは、なおいっそう残念なことと言わざるをえないであろう。

9) 坂本1970, 124参照。

そうした評で知られたその経済学上の主著<sup>10)</sup>が、先般、久しく置かれてきた敬遠状態を脱して、ようやくその全体が邦訳され刊行されるに至った。この難事業を単独で完遂された訳者の尽力に深く敬意を表したい。よく練られた平明な——時に流麗とさえ形容したくなるほどの——日本語で読めるようになったことは、上述の事情からして経済学研究の世界全体にとって裨益するところ大であるに違いない。本稿では長く閑却され続けてきたこの著作へのわれわれなりの一次接近として、まずその全体的な論理展開を遠望しつつ、社会経済学の一つの源流における三者の

- 
- 10) 日本におけるプルドン研究の先駆けの一人で『所有とは何か』のフランス語原著からの邦訳者である長谷川進氏も、その遺著で「プルドンは、周知のように、きわめてつかみがいな思想家である」とし、独学者にありがちな諸説の列挙、表現の誇張、独創性、反体系的性向などを原因として挙げておられる(長谷川1977, 1-2)。親マルクスの立場から出発しながらプルドンの思想に共感し、やがてプルドン研究において一つの中心的な役割を果たされることになった先述の河野氏も、「プルドンは強じんな思索力の持ち主ではあるけれども、時として着想の豊かさに酔い、自分独自の概念を自明のものとしておし出すので、著述を時として判りにくいものとする欠点をもっていた」と記されている(河野1987, 8)。また山本光久氏は、これも大部の意欲的な邦訳書の「訳者あとがき」でプルドンについて、「関わった三つの新聞で精力的に書き継いだ『記事』は別にして、全集にして「五十巻以上四〇著作以上にも上る膨大な『言葉』=メッセージ」を残したとされつつ、その「言葉は常に、『現実』と『観念(夢)』がショートし、火花を散らす磁場で」発せられていると特徴づけておられる(Proudhon 1849=2003, 511, 515)。大部かつ難解というものは、したがってそのようなプルドン的な思考の展開=著述法全般の特性といえるのかもしれない。しかし、当時の日本の代表的なプルドン研究者を結集した共同研究の報告書が、その40余の著作等について一つひとつ丁寧な「解題」を試みている中であって、この経済学上の主著に関してだけは別して、「この著作は、要約しえないたぐいの書物である。上下二巻八二六ページ[Marcel Rivière版のページ数と思われる——引用者]に及ぶ大著のゆえではない。それは余りに幅広く、余りに融通自在なプルドンの精神のせいであり……[後略]」(河野編1974, 363)と記して要約的な解題を断念されているように、多くの研究者が指摘する上述の特性は、この著作において殊に顕著にあらわれているようである。因みに注6の諸研究においても、本書は「難解な『体系』」(佐藤1975, 235)、「不透明な論理の運びと思考の難解さ」(藤田1993, 79)——後者は原書に対して出版当時にフランスで出た書評の表現を踏まえられたものと思われる——等と評されている。

交錯と異同，そこに含まれた意味を考察するための手懸りを探ることにしたい。社会経済学を目指した前記二系統の始祖たちがその原点において対峙した論敵は，その経済学上の主著において何をどのように問題にしようとしたのだろうか。両系統は，始祖たちによって論難されたこの先行体系については長く等閑に付したまま，それぞれに自己内在的＝内向的な専門細分化と精緻化を進めて多くの成果を上げてきた。しかし同時に，特に環境・労働・貧困・格差などの諸問題に関わって，それらが根源的な限界に逢着しているのではないかとの疑念が表明され始めたのも決して最近のことではない。両系統がともにそれへの論駁を出立の起動力とした人物の体系の中に，そのような限界を乗り越えていくための方途・方向の示唆あるいは可能的契機が潜んでいるということはないだろうか。

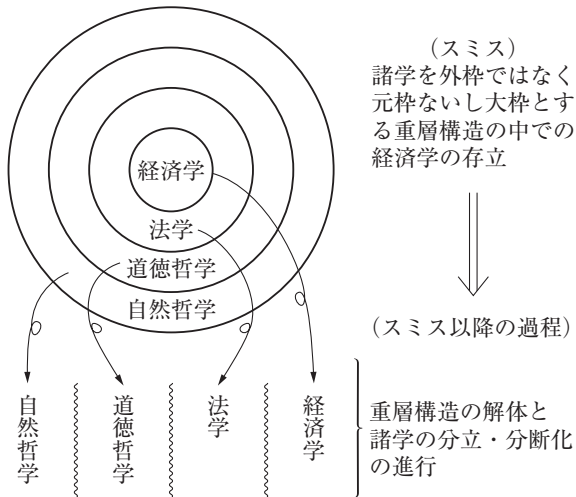
ところでわれわれは先に，上述の二学派をはじめとする現代の諸経済学と冒頭に挙げた古典経済学との差異について，日本における経済学史研究の泰斗・内田義彦教授が最晩年に，その重要な焦点は「自然法的思考」の存否ないし有無にあると考えておられたことに触れた（工藤2015）。すなわち内田教授は，例えばアダム・スミスにおいて経済学が実証科学として成立する際に「自然法」が基礎的母体をなし，その思考体系全体の構成諸次元を統一的に整合させる元樁または大樁をなしていたことを強調されていた。そしてその自然法の内実が，「自然の法則的秩序」「実在する自然に内在する法」としての「自然法則」（それを探究する自然哲学）と「社会的な精神界の法則」（それを探究する道徳哲学・法学など）とから成り，いずれも「客観的な法則であると同時に本来従うべき規範的性格をもっている」ことを力説しておられた（内田1985，最終章）。われわれはそうした思考体系の学的な構造を，対象領域の広さと根源性に鑑みて《Ⅰ自然哲学Ⅱ道徳哲学Ⅲ法学Ⅳ経済学》という包摂＝被包摂的な学的関係図あるいは集合的・重層的な関係構図で示そうと試



みた(図1)が、スミスの場合、具体的な著作等でいえば、Ⅰには「天文学史」「物理学史」等——肝要な点の一つはその自然哲学に宇宙論的  
 視界=次元が含まれていることであると思われる——が、Ⅱには『道徳  
 感情論』や「言語起源論」が、Ⅲには「法学講義」等が、そしてⅣには  
 『国富論』等が、それぞれ該当するであろう。内田教授は、スミスの思  
 想体系において重層的に成立し存立していた経済学が、ポスト古典学派  
 的な展開の中でこのような学的構造を解体され、諸学の分立・分断化が  
 進んで枢要不可欠な基盤を喪失してきたのではないかとの危機意識から、  
 最後の著作を「今こそ自然法的思考を」と強く訴えられて締め括られた。  
 それは教授が後進・後学の人々に対して最も伝えておきたいと考えられ  
 た遺誡であったのかもしれない<sup>11)</sup>。われわれにはそのように思われる。

このことを踏まえた場合、では前記二系統の始祖たちがそれぞれその

図1 スミスとそれ以降における経済学の学構造的位



出典) 工藤2015, 11の図2に加筆。

注) スミスたちの自然哲学にはその枢要領域として宇宙論・  
 天体論が含まれていた。

批判・論駁から自己の経済学形成を開始したプルドンの思考体系は、上述のような学的構造ないし集合的關係構図でいえば、どのような広がりをも有していたのだろうか。それは多分野の研究者による有機的な共同研究によってはじめて解き明かしようし解き明かされるべき問題であるが、そうした性質を有する先駆的研究を参照する限りでも<sup>12)</sup>文法論・フランス語起源論、文学論・芸術論、宗教・教会・正義論、法・統治・政治・階級・家族論、経済・租税・信用・労働論等々、プルドンの思考が、まさに「知的プロメテウス」と評されるに相応しく、きわめて多くの領域・次元にわたっていることは明らかである。その経済学上の主著への一次接近を試みようとするここでも、そのことはあらかじめ銘記しておく必要があるであろう。

### 3. 経済学上の主著の前体系-体系本体的な全体像

テキストの初版は第1巻 (Tome 1) が (43+) 435ページ、第2巻 (Tome 2) が531ページであるが、邦訳では上巻567頁、下巻625頁となっている。全14章が第8章までとそれ以降とで二つの巻に分けられているが、あらかじめ本論全体の構成を確認しておけば以下の通りである。

- 
- 11) 翻ってそれはまた、教授が青年期の煩悶と模索の中で梯田秀氏の『社会起源論』と出会って大きな感銘を受けそれを愛読書とされたことも深く関わっているのではあるまいか。あるいは、そのとき受けられたものが、生死にかかわる大病=大手術を経験された後、「心の奥に棲む」状態から、再び問題意識の前景に、実感を伴ってより大きく、より切実なものとして蘇ってきたとも言えるのではあるまいか。梯氏の著作集の刊行に寄せて内田教授は次のように記されている。「『社会起源論』は、暗闇の中で社会科学研究の焦点を模索しつつあった私に、……群書が与えない明るい灯をかかげてくれるものであった」(内田1982=1988, 454)。
- 12) 例えば注10に挙げた河野編1974はプルドンを巡る12の論題に関する研究論文とプルドンの40余篇の著作・論考の解題から成り、また河野編1977=2009は4部13節43主題に分けて編まれたアンソロジーであるが、これらからもその思考展開の多分野・多次元ぶりが歴然と見て取れる。

- 第1章 経済科学について
- 第2章 価値について
- 第3章 経済発展の第1段階——分業
- 第4章 第2段階——機械
- 第5章 第3段階——競争
- 第6章 第4段階——独占
- 第7章 第5段階——警察あるいは税金
- 第8章 矛盾の法則のもとでの人間の責任と神の責任——神の摂理の問題の解決
- 第9章 第6段階——貿易のバランス
- 第10章 第7段階——信用
- 第11章 第8段階——所有
- 第12章 第9段階——共有
- 第13章 第10段階——人口
- 第14章 要約と結論

第1巻では、第1・第2章が経済学体系そのものの導入=起点部をなし、第3章以降、1章ずつを当てて第1段階から第5段階まで体系の継起的・階梯的な展開が図られていき、第8章で前半体系が一旦括られる。その上で第2巻に移り、第9章以降、また1章ずつを当てて第6段階から第10段階まで後半体系が展開されていき、第14章で全体の総括が行われるという形になっている。

ところで前記のテキスト初版第1巻(Tome 1)の( )内に示した43ページというのは、以上のような本論に先行し、本論のアラビア数字によるページ付と區別して大文字のローマ数字(I~XLIII)によるページ付がなされている「プロローグ」と題された部分である。それが特異なしかたで開始され展開され締め括られた後、あらためて本書のタイトル

「経済的諸矛盾の体系または貧困の哲学」が掲げられ、その上で本論＝経済学体系本体の論述に入っていくという体裁になっている。そのような原著とは違って、邦訳書では本論と区別せず一連なりのアラビア数字によるページ付が行われているものの、この「プロローグ」は、分量的に第1章ほかいくつかの章を凌ぐほど長大であるというだけでなく、以下に見るとおり、原著者ブルードン自身が強調しているところによれば、内容的にも格別に重要な意味を有するものであって、その検討は本論とは別途かつ事前に十分行われる必要があるようである。

つまりブルードンのこの経済学上の主著は、形式と内容の両面からみて、経済学体系そのものに入る前に置かれた体系の大枠＝元枠部あるいは体系に先行して確認しておきたい学的構えについて論じた前提＝前体系部とも言うべき〈プロローグ〉、経済学体系本体の導入＝起点部をなす〈第1・2章〉、経済学体系本体の前半部をなす〈第3章～第8章〉、その後半部をなす〈第9章～第14章〉と、大きくは4つの部分から構成されていると考えるのが相応しいように思われる。一次接近を始めようとする本稿では、したがって、まずはそのプロローグに焦点を当てて検討を進めていくのが適切であろう。

#### 4. 「神の仮説」にこめられたもの——プロローグに示された体系の存立境位

ブルードンはこの「プロローグ」を、自身でも「一見奇妙にみえるであろう」としつつ「神の存在を仮定する」ことから始める。現代日本のわれわれの眼からすれば、経済学を主題とするはずの著作でありながら、その劈頭で突然「神の仮説」が論じられ始めると、「奇妙に」思うだけでなく1,000ページを超える大冊の読書意欲は一挙に削がれ萎えてしまうかもしれない。否、それはたんに現代の日本においてのみのことではない。すでに当時のフランスの知識人においてもそうだったようで、例

えばブルードンを直接知りその最初の伝記を書いて彼を「知的プロメテウス」と高評した同時代人のサント・ブーヴにしてからが、この「プロローグ」については、「ただでさえ難しい経済学の本の序文で神の問題を引き起こし「しかも分野外の曖昧な用語を用いてそうする」ものとして「少なくともややこしいこと」だと、きわめて否定的に捉えている<sup>13)</sup>。またおなじく同時代人のマルクスが、ブルードンから贈呈された本書——実際にマルクスが読んだのは自身で購入したもののようなものであるが——を大部にもかかわらずわずか「2日間で」読了して、「悪しき経済学者」にして「悪しき哲学者」の書物と酷評<sup>14)</sup>し前掲の論駁書を執筆することになったのも、より大きな背景があるとはいえ<sup>15)</sup>それほどにも痛烈な非難を浴びせるに至った直接的契機は、開巻第1ページから「神の仮説」で始まるこの「プロローグ」の少なからず衝撃的な——「一見奇妙」というよりもむしろ奇異で不可解きわまりない——第一印象にもあったのかもしれない<sup>16)</sup>。

13) Sainte-Beuve 1872, 221f. : 訳書195.

14) Marx 1847=1950, 11. この訳書が気分を忠実に表現しているかもしれない。

15) 大きな背景の一つとしては、『所有とは何か』における私的所有批判を高く評価したマルクスたちが、ブルードンをフランスにおける盟友たりうる人物と見込み、1844年以降ヘーゲル弁証法等について熱心に解説・教化に努めたにもかかわらず、本書ではそれが正確に理解されているとは見えないことに対する失望や反発などがあったとされてきた。しかしそれに関しては、ブルードンのいう「弁証法」はヘーゲルのそれそのものではなく、フリーエ由来の「系列理論」と接合された独自の——「系列弁証法」ないし「均衡弁証法」とも称される——ものであり、その限りマルクス側の「誤解」とも言いうることに付いて佐藤1973前編第3章等が詳細に分析している。さらにそもそもブルードンがヘーゲル哲学や弁証法を学んだのは、マルクスたちと接触するより数年前の1938年、シュアール奨学金を得てパリのコレージュ・ド・フランスにおける哲学講義を受けた際であったとの指摘もある（長谷川1977第1章やAnsart 1967=1981の斉藤悦則氏による「訳者解説」等において、いずれもギュルヴィッチに依拠しながら言及されている）。

16) マルクスが本書を読了した直後にアネンコフ宛に書いた手紙にもそのことがうかがわれるように思われる（その手紙は『哲学の貧困』の邦訳書にも「附録」の1つとして取められている。Marx 1847=1950, 248）。

多くの場合、そのマルクスとの対比・対照を軸とし動因とするブルードン経済学に関する研究も、本書を主な対象にしながら、そのほとんどがこの「プロローグ」については論及しておらず、その意義の内在的な分析は行われていないようである<sup>17)</sup>。

このように当時であると現代であるとを問わず、またブルードンとの思想的な親疎・遠近の如何を問わず、したがってブルードン経済学の積極的意義を引き出そうとする研究においてさえも、この「プロローグ」とその中心テーマをなす「神の仮説」は評価され研究されることはきわめて少なかったようである。敢えていえば、あたかも触れることさえはばかれ忌避されているとさえ言えるかもしれないのが、この「プロローグ」であり「神の仮説」である。

ところがそうした同時代人や後代の多くの人々の反発や反応とは全く対照的に、当のブルードン自身は、そのように理解され評価されることがたとえ少なからうと——むしろそうした処遇を受ける可能性を予想しつつも——この「プロローグ」をことのほか重要視しているのであって、この仮説について、「それなしには先に進めず、本論を理解してもらうことも不可能だ」(I: 13)<sup>18)</sup>とまで述べているほどである。しかもブルードンによるこのような重視と強調は、決してたんにここにおいてだけ示されているわけではない。本書の執筆が終了しすでに印刷に付されている段階においても、その校正刷を読んでもらった友人ヴィクトール・ゴージェに宛てた手紙には次のように記されている。

17) 注6に挙げた諸研究も、ブルードン思想との関係の如何を問わず、したがってブルードンに比較的親和的で内在的な読解姿勢を示しておられる諸研究においても、前述のようにフーリエ的系列理論やヘーゲル弁証法とブルードンのそれとの関係に焦点を当てて検討しておられる佐藤1973を除いて、「プロローグ」は対象とされていない。

18) 注1に前掲の原著初版t. 1のIページ、邦訳書上巻13ページ。以下、本書からの引用については原著のページと訳書のページをこのように( )に入れて本文中に掲げることとする。訳文は一部変更しているところがある。

「私のプロローグで、私は、あなたが理解されたに違いありませんように、哲学の最新の諸成果を要約しました。しかし、そこで仮説としておかれた考えは、すべての人びとが肯定するか、否定するかどうかで、私にとっては上出来のものです。あなたはこの仮説が順次展開し、つぎつぎに興味ある、予想外の諸結果を導くのをみることでしょう。……プロローグ [は] ……すべて私の創造になります。」<sup>19)</sup>

世人の批評がどのようなものであるかは別にして、ブルードンその人がこのようにも重要であることを強調し、また論述内容に自信と自負を示しているものである以上、このプロローグについては無視ないし回避して通ることができないのはもちろん、内在的な読解努力を疎かにしたまま通るわけにはいかないであろう。

ただ、多くの研究者によって異口同音に指摘されてきたように、ブルードンの思索＝論述法は、たしかに「ショート」による短絡的閃きが相次いで提示されつつ十分に展開されないままに置かれているように見えてもあれば、そして遠近の先々でそれらが「布石」として敷かれていたことが想起されるところもあれば、新しい道筋が次々と現れそれらがさらに枝分かれし自在に伸び広がって「迷宮の森」に踏み入るような印象を与えるところもある、といった独特のものであるのは間違いない。読む側には、入念を期した敷衍的な咀嚼の試みと、諸所に敷かれていた布石の想起的な連結のそれと、思い切った刈込的な前進のそれとが交々求められているといえるかもしれないが、「プロローグ」でも際立つ<sup>20)</sup>そうした特徴的な思考＝論述展開のなかで大きな道筋を見失わないためには、形式面での手懸りも軽んじないほうがよいと思われる。

---

19) 藤田勝次郎氏がその著作の「付章 ブルードンの自筆・未刊書簡」で紹介・訳出しておられるゴーティエ兄弟ほかに宛てた多数かつ貴重な書簡の一つ（藤田1993, 240）からの引用。

その点からは幸いといえるであろうが、この「プロローグ」は、それ自体がさらに、〈まえがき〉的な叙述と、ローマ数字のⅠ～Ⅲを付して区分された3つの節との、計4つの部分から構成される形になっている。諸種の神学的・哲学的な議論が連綿と続けられる箇所等もあって、おそらく今後幾次か解説の試みを重ねても十分な内在的理解に達することは容易ではないであろうが、以下この一次接近では、おかしうる誤読は以後随時修正していくことを前提に、それら分節をも手掛かりとしつつ、まずはわれわれなりにこのプロローグの論脈の大筋を探り出すことに焦点を当てることとしたい。

#### 4.1. 論点の提示

まず〈まえがき〉部分では、「神」を仮説することに関して弁明的な論述を展開しながら、いくつか重要な論点が提示されていく。

先述の通り、まずブルードンはこの仮定ないし仮説が「それなしには先に進めず、本論を理解してもらうことも不可能」(Ⅰ: 13)になるほど重要なものだと強調しながら、しかし当代においてはもはや——おそらく特に知識人や教養ある人々の間では——神を信じるのは「怪しい考え方」であり、その存在を肯定的に考えるのは「頭の悪い証拠」と見なされがちであるという。それについては十分に承知していると言明しながら、にもかかわらず敢えてそのように未知の存在について仮定を行うのはどうしてであろうか。

ブルードンの弁明的論述において注目される点の1つは、思考の視界を人間社会から、それを一部として包摂する宇宙的自然にまで一挙に拡

---

20) 本書の邦訳書の——長年ブルードン研究に携わってこれらフランス語にもきわめて堪能な——練達の訳者が「わかりにくい部分」として特に挙げておられるのも、実はこのプロローグ「神の仮説」にほかならない(下巻「訳者解説」629)。



大することから始めていることである。つまりそのような仮定は実は一見してそう思われるほど奇妙なことではないのだとして、ブルードンは、現に「頭が良く」真っ当な考え方をする代表的な存在とされているはずの学者たち博士たちが「宇宙においては未知の力 [une force incon nue] が働いていて、諸々の恒星や原子を引きつけ、宇宙の機構全体を動かし続けていると仮定している」(ibid: 同前) という例を挙げ、しかもそれが世間でも当然のこととして一般的に広く受け入れられ、のみならず、それに基づく研究が称賛されさえしているではないか、という。多くの人々が認めるであろうそうした事実を指摘しておいた上でブルードンは、自分が「人間社会の動きを説明するために……神のようなものがそこで作用していると仮定する」(ibid: 14) のは——たとえそれを怪しみ反科学的だと難ずる人々が少なくないとしても——実はそれと同じことなのだ、というのである。たしかに学者、知識人、教養人たちにもおよそ分かっていないことの方がはるかに多い広大な宇宙について、その秩序と運動を説明せんがために、何か未知の力が存在しているものと仮定され研究が進められてきたのは間違いのない事実であろう。誰もが肯定せざるをえないこうした事実を確認しておいた上で、そのような宇宙に含まれる人間とその社会に再び視界を絞り込み、その人間社会の秩序と運動を説明するために、そこに作用する未知の力の存在を「神」として仮定するのは、果たして世に言われ思われがちなほど怪しげで不合理的なことであろうか、そうではあるまい……。宇宙論的な自然的世界の秩序と運動において作用している未知の力の存在に関する仮定と、明らかにそうした世界の一部をなしている人間社会に関するそれとの相対的対比ないし被包摂的類比は、巧みな——まさしく「上出来」な——議論の進め方といえるかもしれない。

さらにもう1つ注目される点——そしてマルクスをはじめとする当代の哲学者・思想家たち、さらには後代の研究者たちとの視座の異なるい

しづれについて考える上でも手懸りとして重要と思われる点——は、このような「神の存在の仮定」という考えに思い至った経緯が述べられている中にある。

上述した通り、人間社会の動きを説明するために、神のようなものがそこで作用していると仮定するなどすれば、怪しげで非科学的ないし反科学的な考え方として真面目な人々から反発を受けることになるのをブルードンとしては十分に承知している……否、承知しているどころではなく実はブルードン自身、「偽善や愚行が神を表看板にしてなされ」(I: 13) たり、聖職者が「教義や作り話をういてペテンを働いている」(II: 14) ことにどうにも我慢がならず、そうしたことに對して激しい反感・反発を感じたことから「かつて神学者たちに会えば不敬なことばを吐いたことさえある」(ibid.: 同前) ほどだというのである。それにもかかわらずそのようなブルードンが、こともあろうに何故に「神の存在を仮定する」に至ったのか。それはほかでもなく「民衆の信仰心」を検討した結果であるという。つまりブルードン論ずるところの「神の仮説」という問題における焦点は、僧侶や聖職者の言説そのものでもなければ、有神論たると無神論たるとを問わず学者や思想家の諸々のドグマそれ自体でもなく、そのような教説や教義や教条などとは異質・異次元の、ときに「神の最良の友」と呼ばれることもある素朴な「民衆 [people]」の心に宿るもの、そのような人々の、むしろ内生的ともいえるような信仰心にこそ当てられている。前二者と後者とが全く無縁だということではもちろんないとしても、ブルードンが注目し尊重するのを感じているのはあくまでも後者であって、それを端から否定することに対して大きな躊躇・逡巡を覚え「心が震え」(ibid.: 同前) るほどでさえあったという。そうしたところから理性的に判断した結果、上記のような仮説を立てるに至ったというのである。

しかしそれでは、そもそもそのような「民衆」に注目しその心に宿る

もの、人々の信仰心に焦点を当てることになったのは一体どうしてであろうか。それはプルードンが「さまざまな社会革命の秘密を、あらゆる既存の思想にたよらずに自分で心ひそかに研究していくなかで」(ibid. : 同前) のことである。そうするなかで、民衆の心に内生するもの、ひとびとの心に宿るものが、諸種の社会的な変革のプロセスにおいて、きわめて大きな働きをしていることに思い至り、そのような「神」を「重要な未知数 [le grand Inconnu]」、偉大な未知の力として仮定することになったというのである。つまりここで問題とされているのは社会の変革であり、それを担いその成否のあり様を左右する「民衆」=人々の心に内生し働き作用するものでこそあって、「神」として仮定されるその重要な未知の力は、そうしたプロセスが起動し展開していく上において「弁証法的な媒介者」(ibid. : 同前) として必要とされ位置づけられているのである。

#### 4.2. 神=集団的直観=社会的自我=普遍的理性の展開と転回

以上を〈まえがき〉としつつ続く第I節でプルードンは次のように論じる。人間は個人としては自らを自由だと思ひ知性や教養が高まるにつれて一層自由になると考えているが、社会つまり集団となるとそれとは大きく違って「何かの力によって動かされ」、「何か上位の指図で動いて」おり、「外に存在するもの」によって「未知の終点に向けて」「いやおうなく突き動か」(II-III : 15) されているように見えてくる。人間社会の歴史において成立してきた諸種の制度、例えば「君主制」や「共和制」あるいは身分制度や司法制度などもこのような「社会の無意識のいとなみ」(III : 15) によって、つまり人々が何かに「動かされ」るかのよう「動く」ことによって形成され改革されてきた。ヴィーコ、ヘルダー、ヘーゲルなどをはじめとする歴史哲学者たちは、こぞってこのような「人間の動き全体をつかさどる摂理」(ibid. : 同前) を探究し解明しよ

うとしてきたが、ブルードンが社会変革の秘密を探ろうと研究を進めるなかで自ら気づいたこととして強調するのは、社会＝人間集団というものは、そのように「動き出す前に必ずその霊を呼び出し、自分たちで無意識的・本能的に決めたことを「あらためて上から命令してもらい」たがるものだということであり、またこの「神秘的」で「超社会的な力」は「人間に直感をさずける霊的な能力として」歴史上どの時代、どの社会であろうと「遍在している」ということである (ibid : 15-16)。そしてそうした靈感に打たれた人間が「見えざる摂理」を崇め、それに支配されていると感じて名付けたのが「神 [Dieu]」というものにほかならない。それが人びとによって——無意識的・本能的であるにせよ自分たち自身に淵源するものとして——「我」(ibid : 16) とも呼ばれ、有難くも秩序を創り出してくれる創造主＝人格と知性を備えた「自我 [Moi]」として称えられることになったのは自然なことである。原初以来その判断は「民衆の聲は神の聲 [vox populi, vox Dei]」と言われてきた通り、就中、典型的には「民衆の大歓声」によって表現されるものと見なされてきたし、それによる支持表明がことのほか重要視されてきた (IV : 17)。つまり「神」とは人びとの社会的な交わりの中で生まれ、民衆の社会生活の経験から形づくられ共有されるようになる「普遍的理性」が「客体化」(V : 同前) されたものであり、人びとの「集団的直観 [l'instinct collectif]」(VI : 18) であり、「社会的自我 [moi social]」(ibid. : 同前) にほかならない。あるいは、それを「近代的な用語であらわしたもの」こそ、他でもない「普遍的理性 [la raison universelle]」なのだ (ibid. : 同前) というのである。ここで特に注目されるのは、ブルードンにあっては“神＝人間の本質の疎外”あるいは“類の本質の外化”といったヘーゲル左派的な規定の仕方、見方によっては超越的な“極め付け”とも解されかねない外在的な処断がおこなわれているわけではないということである。敢えて対照的な表現を試みるとすれば、むしろ社会

内在的な自己確認あるいは民衆の集団的な自己認識が目指されている、  
とでも言いうるような立処がとられているということである<sup>21)</sup>。

ブルードンによってその存在が仮説される「神」は、歴史的にはこのようにその起源を辿り由来を跡づけうるものであるが、その内実は歴史の中でさらに大きな次元的な深化と世界観的な位相展開を経ることになる。上述のように人間は社会の形成と改革を始動し領導するものとして自らの集団的直観=社会的自我を感じとり、それを「神」と名づけ自らの「創造主」として崇め称えるようになるが、そうした心的作用はそのような人間集団内あるいは社会内的な位相ないし次元に留まるものではない。それはさらに対自然的あるいはむしろ内自然的な位相ないし次元にまで大きく展開され拡大されていくのであって、人びとは「動物や植物、湧き水や天候」のなかに、そしてさらには「森羅万象 [tout l'univers 宇宙全体]」——朝昼夕夜、潮汐、春夏秋冬、星辰星座をはじめとする規則的な変化・運行と秩序、あるいは天変地異的なその破壊と再生・再創造、といった諸事象・諸現象——のなかに「何かしらの配慮や意向が働いていると思ったときから、そのひとつひとつに、やがてはその全体に、それを統べる一個の魂、精霊が宿ると考えるようになる」(VI: 18-19)。人びとの交わり、民衆の社会生活の中で形成され共有されるようになった普遍的理性の客体化として成立した「神」=「自我」の観念が、こうして人間以外の自然の諸存在や諸事象・諸現象、さらには人間と社会をそのごく一部として包み込む全自然的・全宇宙的 [tout l'univers]

---

21) ブルードンは、先に引用したヴィクトール・ゴージェエ宛の手紙において、一方で「プロローグで……哲学の最新の諸成果を要約しました」と記すと同時に、他方で「プロローグ [は] ……すべて私の創造になります」とも述べており、一見矛盾しているようにみえる。しかしブルードンが諸他の哲学・思想を研究し吸収し要約するという場合、ヘーゲル左派のそれも含めて、たんなる祖述が行なわれているのではなく、全く異なる立処：視座から、時に換骨奪胎的とも言いうるような創造的な読み取り、読み替えが行われているように思われる。

な広がりをもつものへと大きく展開されていく。生命の存在しない無機的な宇宙史、その中で原子の複合による生命の誕生から始まった地球の自然史とそこにおける諸変動・諸変遷、そうした発展の全行程からいえば、人間とその社会はそのような宇宙史的・自然史的過程の最終＝最新段階において産出されたものとして「自然の頂点」ともいうことができよう。そのような「自然の頂点としての社会」において人々によって生まれ抱かれるようになった神＝自我観念が、「最も卑小な存在、生命をもたない無機物」「物質の最小単位である原子」(VII: 19)を含む森羅万象・宇宙全体に、何らかの配慮・意向を見出し、その有難さへの感謝的応答ないしそれらとの調和的整合とその持続を願い志向するものにまで拡がっていった。そうだとすれば、それは「集会的自我」(ibid.: 同前)、「社会的自我」から「宇宙的自我 [moi cosmique]」へと「昇華された」(VIII: 20)ものとして、それを宿す民衆の心、人びとの心性は自然史・宇宙史の真相を映し捉えて正確にして偉大といえようし、真の意味で「普遍的 [universel 宇宙的] な理性」の境域に達しているというべきかもしれない。

しかしそのような観念は、それをより完全な体系立ったものにしようと人間の「知性」がさまざまな教義・教条・教説等に仕立てていこうとすると解体し始める。民衆の社会生活のなかから内生し、その社会的交わりのなかで人々の心に自然に宿るものとは異質・異次元のものへと外在化され転相され転回されてしまう。そしてそのように民衆から疎外され人間社会から外在化した「神」をめぐる、諸種の神学や哲学によって形而上学的な議論と論争が延々と続けられていくことになる。

### 4.3. 科学的段階における弁証法的接近

続く第II節の冒頭でプルードンは、コントの『実証哲学講義』と自身の前著『人類における秩序の創造』(Proudhon 1843)への参照を求め

ながら、科学は、文明の時代区分になぞらえるならば「宗教的段階」「形而上学的段階」「科学的段階」という3つの段階を経て発展するものだとする (XII : 25)。そして現代はその第3段階に入っているが、ここでは〈まえがき〉部以来論じてきたような「神秘的な力」や「超社会的な力」(III : 15)、「超自然的な力」(XV : 26)が科学によって合理的に解明されようとしており、「神の存在」といった形而上学的な謎も決着したものとして済ますわけにはいかなくなっている。否それどころかむしろ「人類はかつての神の観念に相当する何ものかを承認し肯定する段階にさしかかっている」のであって、そこで重要になるのが「熟慮と不屈の弁証法」であるという (ibid. : 27)。後続する本論=体系本体で詳述されるように、プルドンの経済学体系は、「分業」「機械」「競争」……等が継起的・段階的に展開されるに際して、その各段階それぞれの積極的・肯定的に評価しうる経験的諸要素と消極的・否定的なそれらとを析出し、そのポジ・ネガ両面を二元論的・二項対立的に精細かつ綿密に分析検討しながら、それらの対立・矛盾を契機として次の段階に推転し移行していくという論述方法がとられている。まさに「熟慮と弁証法」が適用されたものであるが、それはプルドンの次のような考え方に基づいている。

「絶対なるもの [l'absolu 完全なるもの] のみが真であり現実的であって、それを分割すればどの項もすべて等しく矛盾をはらむことになる。しかし絶対なるものにわれわれはまったく近づきがたく、ただその二項対立を通してしか理解できないし、そうした項のみがわれわれにとって経験可能なものである。したがって……科学にとっては二項対立が第1条件なのである。」(XVII : 27)

あるいは別言して次のようにも論じられる。

「われわれはまず二元論から出発しなければならない。たしかに、分けられた二項はどちらも偽であるが、二元論はわれわれが真なるものを得る条件として絶対に回避できない。」(XVIII : 28)

先に触れたように、プルドンの経済学体系の独特の論述展開は、このような考え方に基づき導かれた「熟慮と弁証法」のプロセスそのものといえるのである。しかしこうした考え方は、プルドンにとっては、たんにその経済学体系の展開方法として適用されているだけでなく、より広く「科学的段階」としての当代において、真の社会認識・自然認識に至るための科学なるものの一般的な方法に他ならない。否さらにいえば、「秩序のあるところには必ず知性が存在する」(ibid. : 29) との了解のもと、秩序の革新のために知性の革新をめざすプルドンにとって、二項対立的・弁証法的な検討を倦まずたゆまず反復し、徹底して熟慮に熟慮を重ねることで、現存する知性を刷新し集合的理性を練磨していこうとする自身の社会的活動の方法論そのものでこそあったのだろう。その方法論的・戦略的な活動が、「人間の理性は、集合的理性としてあらわれる場合には、人間が熟慮に熟慮を重ねた場合と同様に決してまちがわない」(XXV : 36) と言明でき信頼できるほどにまで、集合的理性を練磨し続けようとするものであったことは、次節にみる論述からも明らかのように思われる。

#### 4.4. 集合的理性の練磨、普遍的理性の更新

長い「プロローグ」の掉尾をなす第Ⅲ節は、「本書は政治経済学の本であるのに、なぜ私はあらゆる哲学の根本をなす仮説から出発しなければならないかについて語らねばなるまい」(XXVI : 37-38) として、プルドンが「神の仮説」を必要とした理由があらためて次の6項にわたって論じられていく(A~Fの項記号は筆者が付したものであり、ま



た末尾の [ ] 内の数字は原テキストにおけるその項の論述行数を示している)。

- 【A】「社会科学の権威を打ち立てたいため」(ibid. : 38) [53]
- 【B】「科学の名でなされる国内の改革は正しいとするため」  
(XXVIII : 39) [35]
- 【C】「文明と自然の結びつきを示すため」(XXIX : 40) [32]
- 【D】「数多くの党派のいずれにも悪意をいっていないことを証明  
するため」(XXX : 41-42) [45]
- 【E】「読者に本書の文体を納得してもらいたいから」(XXXII : 41)  
[19]
- 【F】「本書を出す理由の説明になるから」(ibid. : 44) [350]

著者プルードンの力のこもり方や思いの進み方は、筆の走り具合や論述の分量の多さとして自ずと現れるものかもしれないが、しかし論述分量の多寡が論述内容の軽重や深淺をそのまま示すわけでは必ずしもないであろう。先述した咀嚼的敷衍、想起的連結、刈込的前進の交々の試みが一層求められる箇所の一つのように思われる。ここでは全ての項について十分に展開することはできないが、二次以降の接近に備えて、われわれにとって特に興味深く思われる項を中心に要点のみを摘記しておきたい。

【A】ここで第1に注目されるのは、「社会科学の権威」について論じようとする際に——先に見たこのプロローグの冒頭において行われたのと全く同様に——宇宙論=天体論を先行させ、それと類比的ないし相似的に説かれていることである。すなわち宇宙のシステムと天体の運動に関する学問である「天体に関する哲学」=天文学においては、その説明に当って「専ら外観 [l'apparence 見た目, 見え方] に依拠」し——「一

般庶民と同じ目線で [avec le vulgaire 民衆とともに] 視覚という感覚に依拠し——人々に見えているところから出発して、例えば「空は円天井、地球は平、太陽は風船のように空に浮かび東から西へと弧を描いて動く」(XXVI: 38)と仮定したし、事実ギリシャ時代以来、長くそのように説明され納得されてきた。その際、天文学者は、民衆が広く共有している視覚という感覚に「間違いがないことを前提とし」(XXVII: 同前)それを基礎として、そこから説き起こしていることが重要である。もちろん望遠鏡の発明や改良などによって「後に観測が進むとともに、当初は絶対的であった与件に修正が加えられることはありうる」(ibid: 同前)し、実際、コペルニクス、ガリレオをはじめとして天文学の歴史は、そのような修正と補完の連続であったということが出来る<sup>22)</sup>。しかしそうした修正や補完が行われるからといって、天文学は、学問の基点となり起点となる視覚という「感覚」がそもそもからして「われわれを欺く」とか「間違っている」とかいったことを「決してア・プリオリに認めたりはしない」(ibid: 同前)。それどころか、そのように広く民衆に共有された感覚を基礎とし前提として、そこから出発するものであるからこそ、人びとが納得していくものでありうる。そこから始め、観察と考察を積み重ねることによって「それ自身で修正され補完され」ていくということこそが肝要であって、そうであるからこそ「感覚の権威は揺らぐことなく、天文学も成り立ち」(ibid: 同前)、人びとに説得力・影響力を持つ科学として成立しうる。約言すれば重要なのは、民衆に共有されているものを端から「ア・プリオリに」「間違っている」などと外在的・超越的に否定したりしないことであって、それどころかむしろ一旦それを正しいものと仮定することから出発して、観察と熟慮を重ね

---

22) アダム・スミスが20歳台半ばに執筆し、晩年に至るまでその公刊を希望し続け没後5年目について実現した「天文学史」は、その全史を総覧したものであった (Smith 1795)。

る中で民衆とともに不断に自己修正を遂げ完全に近づいていくものであってこそ、その学は人びとに広く信頼され真に説得力＝影響力＝権威を有することができるであろう。

ブルードンによれば、宇宙のシステムと天体の運動をめぐる学問である「天体に関する哲学」＝天文学について確認しえた以上のようなことが、人間社会のシステムとその運動を巡る学問である「社会に関する哲学」＝社会科学についても全く同様に当てはまる。すなわち社会科学は、「人類が類として」「まやかしの」行為＝判断、「間違っただけ」行為＝判断を行うなどということをして「決してア・プリオリに認めたりはしない」し、そうしてはならない<sup>23)</sup>。それどころか人間の類としての行為＝判断、それを支え導く理性は正しいものと仮定するところから出発しなければならない。フランス革命において高らかに謳われ承認された「民衆の主権 [la souveraineté du peuple 国民主権, 人民主権]」とは、実に人びとにおける理性の共有とそれへの依拠の主張に他ならず、そのような意味での「理性」への信頼と「根本において同義」であるはずだ。したがってブルードンの社会哲学が考えるところによれば、「人間の判断は現場での直接的なことがらについては常に正しい」とするところから出発することこそ肝要であって、そこから諸々の経験を積み試行錯誤を重ね、さまざまな考え方を身につけるにつれて、それ自らによって修正・補完され次第により明確なものになっていき、ついには個々人の考えが一般理性とつねに一致し、确实性の範囲が無限に広がっていくことになるのだ…… (ibid: 同前)。

人びとの理性と判断はこのようにして歩一歩練磨され更新され補完さ

---

23) 先に注21で述べたこととも関わるが、ヘーゲル左派的な“神とは人間の類的本質の疎外態である”という言説は、場合によっては社会外在的で超越的な議論と解されうるし、高みから一般民衆を見下ろすような視線を体したもののようによ解されるかもしれない。ブルードンの論述には、それとは全く異なる立処と視座への志向が濃厚に現れているように思われる。

れていくのであって、そのプロセスに同道し集合的理性のそうした練磨・更新・補完を促し助成するものであってこそ、科学は信頼され信用され、科学としての説得力が保障され基礎づけられることになる。人間の感覚・視覚と天体に関する学問について述べたと同様のことが、一般に人間の理性・判断と社会に関する科学についても、このように当てはまる、というのである。

そうである以上、社会の具体的な成り立ちやその諸制度・諸規制について問おうとする場合も、そのことに十全に留意する必要がある。すでに第I節で「君主制」「共和制」等について触れたように、「あらゆる政体の最初の宣言」はその「裏付け」「原理」を必ず「神」に求めてきた。それは「理性の初源的な判断 [le premier jugement de la raison]」が、「社会を何らかの設計、配慮、英知にしたがって統制されている」と捉え、したがってまたその構造や抱える問題を論理的に分析し解明することができるしそうすべきものと捉えていることを意味しよう。つまり「こうした判断こそ、偶然を排除し、社会科学が成立する可能性を基礎づけたもの」(XXVII: 38-39)にはかならない。そしてこれは決してたんに歴史的な過去のことでなく、ブルードンにとっては現代においてもきわめて重要な問題であって、「社会的事実についての歴史的・実証的な研究、社会の改良と進歩をめざす営みは、必ず民衆と同じ目線で [avec le peuple 民衆とともに] 神の存在を仮定せざるをえない」のだという (ibid.: 39)。集团的理性の現在のあり様を踏まえ、それに即しそこから出発することが基本であり肝要であって、それを起点として共同的に自己練磨し刷新していくのであるから、「その判断をのちに再検討することになるのも当然」(ibid.: 同前)であり、また必要・必然である。あるいはブルードンに即せば、むしろ、その「判断」を後に再検討し修正・補完することを通して社会の改良と進歩を遂げていくためにこそ、そしてそのような役割を果たしうる説得力=影響力=権威をもつ

た社会科学を打ち立てるためにこそ、民衆と同じ目線で、民衆とともに「神の存在を仮定する」必要があるというのであろう。

【B】そうした「神」については、「社会に外在し上から社会の動きを操るものだ」という見方や「社会に内在し……無意識の理性に等しく、一種の本能として文明を前進させるものだ」という見方など様々でありうるが、いずれも「神」によって「社会が動く」(XXVIII-XXIX: 39-40) = 変化する = 新たな事態が生起するという了解が絶対視されている点では一致している。だが先に第I節でも確認されたように、「神」とは民衆の社会生活のなかで生まれ共有されるようになった普遍的な理性の客体化であり、そうしたものとして人々の過去の社会的経験から形成され今後を方向づけるものだとすれば、そのような了解が意味するのは、「過去に起こったことがらが未来に起こることがらを決定づけ正当化する」(XXIX: 40) ということにほかならない。そしてこのような「系列的な連鎖」は科学が精神の中で行っている方法そのものであって、まさしく「科学は運命に合致する」のである。かくして「生起することがらは全て理性に由来し、逆に理性は生起することがらの経験に基づいてのみ判断を下す」ものだということができ、したがって「科学」は「社会の統治に関与する権利」を有しているし、社会の統治、それ故にまたその「動き」= 変化 = 改革の「指針」、「最高の主権者」として承認されなければならないことになる (ibid: 同前)。このB項の主題「科学の名においてなされる国内の改革は正しいとするため」の論理はこのように構成されているように思われる<sup>24)</sup>。

【C】先に第I節で確認されたように、「神」とは「自然の頂点としての社会」において人々の社会的交わり、民衆の社会的な生活経験の中から生まれ形づくられて共有されるようになった集団的な直観あるいは普遍的な理性の客体化であり、そのようなものとして形成され成立した民衆の「集合的自我」「社会的自我」に他ならなかった。しかもそれは、

大小様々な自然の諸存在・諸事象そして森羅万象に、それらから供され授けられる自分たち人間への何らかの配慮・恩恵を感受・感得し、それらとの調和的整合を願い志向するものとなることを通して、全自然的・宇宙的な広がりをもつものへと高次化され、その集成的自我ないし社会的自我は真に普遍的＝宇宙的な理性たりうる宇宙的自我へと昇華されたのであった。

民衆の思考の世界あるいは視界が、「神」という観念の創出と抱懐を通してこれほどにまで拡大され高次化され昇華されているのだとすれば、それは「自然の法則と理性の法則の一致を示唆し」「人間の営みの中に神の創造作業の仕上げを見ることを可能にし」「人間を彼の住んでいる地球と連帯させる」のであって、そのように地球を「開発する作業」の中で人間は「あらゆるものごとの原理と目的を把握する」ようになりうる (ibid. : 41)。それは「自然が必然性にそって進めているように見えること」を「人類が意識的に行う」のを可能にするものであり、そのことによって「行動と法則とは一致する」ことになるだろう。「知的な存在」としての人間は、そのようにして知性を限りなく発展させ続けることによって自分たちを「宇宙の果て、永遠の彼方にまで押し運ぶことができる」(XXX : 同前)であろう。

続く本論であるブルードンの経済学体系を貫く主題は「労働の組織化」

- 24) なお、この「科学の名においてなされる国内の改革」の原文は 'les réformes à opérer, au nom de la science, dans l'État' (XXVIII) であり、そのうちここでは、社会の改革と科学との関係の議論に焦点を絞って検討してきた。だが 'dans l'État' を「国内の」と訳すのが適切であるとすれば、それは、ブルードン経済学体系全体の性格を考える上でも一つの手懸りとなるかもしれない。つまり本論の後半体系は、冒頭第9章の「第6段階 貿易のバランス」が対外関係に論じた後、続いて議論が国際経済→世界市場へといわば拡張され外展開していくのではなく、再び1国内へといわば内転し内展開していく形をとるが、そのことをどのように理解すればよいのかを考える緒ともなりうるように思われる。

であるが、人間が「自分たちの間できちんと労働を組織」するとは、このような宇宙的・地球的な展望の中で均衡的・調和的な自然-社会関係を実現することに他ならず、そのために「理性の理論は……直接的に観察可能な広大な自然の無限に多様な形態から引き出される」(ibid.: 同前) ことになるというのである。プロローグというこの前体系は、その第Ⅲ節のここで、体系本体がどれほどの広がりにおいて世界を捉えようとしているのか、したがってまた集合理性の練磨と普遍的理性の更新を通して人びとの共同的な自己認識をどれほどの視界において達成しようとしているのかを、はっきりと語り出しているように思われる。

【D】「神」をめぐることは、実に多様な主張・立場がありえようが、ブルードン曰く、自分のこの仮説はそれらのいずれとも対立するものではなく、現に「信仰され崇拝されている幻を……明るい陽の下で眺めたいと願う」ものにすぎないのであって、自分の主張は「哲学とは……目の前にある社会と自然そのものを研究することだ」(ibid.: 43) ということに他ならない。

【E】ブルードンが「いわゆる神なるものを未知数として前提した」のは、「厳密な弁証法の要求にしたがって」(XXXII: 44) のことであって、「神」は現に「伝統」「法律」「思想」「言語」「科学」をはじめ「われわれの周りに遍在」しており、それ抜きでは「話すことも、行動することも……考えることさえもできない」(ibid.: 同前) 状態である。そしてそのように遍在し、したがって当然視され、殊更に問題視されることもないものとなっているからこそ、上述来の企図を有する社会科学書たる本書は、「一見奇妙にみえるであろう」ことを承知で敢えて劈頭にそのような「前提」を提示したのだという。

【F】ブルードンによれば、普遍的理性は「いわば社会に内在した理性」「永遠かつ非人格的で沈黙したままの理性」と解されるが、実際には社会に何か問題があるとき「誰かの口を借りて問いが発せられ、その

回答はまた別の誰かの口を借りるという形」(XXXII-XXXIII:44)をとって展開されていく。近年のフランスでいえば、著名な学者たちによって構成されている「道徳・政治科学アカデミー」が、貧困の原因、所有、平等と改革、自由と特権、利潤と賃金、交換と価値、信用と労働、自主的協同組織、保険契約等々、実に多様な社会的テーマで次々と懸賞論文を募集してきた。昔から「革命が起こる前には動物がしゃべり出すといった、何かびっくりするような予兆があると信じ」(XXXV:47)られてきたが、保守派であり体制派である筈の「アカデミー」が相次いでこのような設問を提起しているのは社会的な危機の訪れを告げているものにはかなるまい。そして「アカデミーが神から靈感をさずかった社会の代弁者として問いを発し」ている以上、われわれとしてはそれを、先述した「熟慮と弁証法」の社会的プロセスを起動し前進させていく好機と捉えるべきであって、自分も「同じく社会を代弁する予言者のひとりとして、その問いに答えるようにしたい」(XL:53)。「神の声はいま、賢者たちの雄弁な舌によって、あるいは民衆の言葉にならない呻きによって、表現されている」。自分はそうした声によって求められているものを「自分が学びとった予言のルールにしたがって何の遠慮もなしに探っていく」(XLI:53-54)。読者よ、「黙々と冷静にものごとを考え」、ともに「社会のしくみという秘密」を「見てとれる高みに到達」しようではないか (ibid.:54)。後のマルクスによる「経済学批判」の序言を彷彿とさせるような呼びかけによって、プルドン経済学の前体系部をなすこの長い「プロローグ」は締め括られるのである。

#### 小括. 社会経済学の源流における視座と視界

冒頭でふれたように、経済学の世界は長く近代経済学とマルクス経済学の2系統に区分され、19世紀以降、それぞれが自ら主流ないし正統を任じ、相互に無縁かつ独立に発展を遂げたように見做されてきた。しか



し始源に遡ると、両系統にはいくつかの共通点がある。前者の重要な始祖ワルラスと後者のそれマルクスはいずれも、科学的社会主義者を自任し、従来の政治経済学を批判して社会経済学を目指したことに加え、全く同一の人物を論敵と名指した著作の公刊によってそれぞれ自己の経済学の形成を本格的に開始していたのである。しかも実は当のその人物こそ、彼らに先んじて科学的社会主義を標榜し社会経済学を構想し始めていたのであるが、公刊されたその経済学上の主著は大部かつ難解である上に、その著者が上記の始祖たちによって論敵視され論難されたことそれ自体にも少なからず起因して、以来長く閑却されることになった。その後の経済学は何れの系統においても、始祖たちとその論敵との関係の全容と深淵に関して多面的かつ双方向的な検討が必ずしも十分に行われることのないまま、自己内在的=内向的に発展し、細分化と精緻化を進めて多くの成果を上げてきたが、同時に深刻な限界への逢着を懸念され危惧されてもいるように思われる。社会経済学の源流において構想されようとしながら長いあいだ等閑に付され続けてきた体系に、その限界を超えていく手掛かりとなる契機が包蔵されてはいなかっただろうか。

われわれはそのような関心から、大部難解との評は広く流布しているものの長く閑却されてきたその経済学上の主著を検討したいと考え、プロローグ・経済学体系の起点部・体系前半部・同後半部の4部分からなる全体のうち、一次接近となる本稿ではその「プロローグ」に焦点を絞って解説を試みてきた。そのプロローグは、著者ブルードンがことのほか重要視しその論述内容に大きな自信と自負を示していた箇所であるということに加え、しかしそれにもかかわらず当代においても現代においてもほとんど無視され、あるいはむしろその難解さ故に本論全体、体系本体そのものが閑却される要因ともなっており、したがってその解説こそが全容理解の一つの鍵、不可避な第一歩であるように思われたからに他ならない。

この一次接近によって、そこに込められた意味を十全に読み取りえたとはなお到底言い難いが、上述の諸系統のいずれにおいても従来あまり留意されてこなかった、しかし逆にプルードンにあっては重んじられ強調されている、そしてそうしたことがまた両者の間の諸種の齟齬の誘因ともなっているように思われる、2つの点についてここでは確認しておきたい。「プロローグ」において提示されている著者が重視する立処と展望する世界の広がり、換言すればその視座と視界についてであるが、いずれも、晦渋とされる本書の論述中でもそれが特に際立つプロローグの核心「神の仮説」に関わっている。

ところで、のちにその仕事や活動が広く世に知られ、歴史に名を刻まれることになった人びとを見た場合、少年期以来、貧困、格差、不平等といった問題に自ら苦しみ、恵まれない家庭環境に育ちながら、長じて体制擁護的な思想家・理論家になった人々は少なくない。他方で逆に、そうした問題を解決すべき重要な社会問題と捉え、社会の改革・変革を目指した思想家や運動家の中にも、例えばバクーニン、エンゲルス、レーニンなどのように自身は比較的恵まれた裕福な家庭環境に生まれ育った人々も多い<sup>25)</sup>。代々ラビを輩出した家系の弁護士の子として生まれたマルクスも、青年期までの家庭環境としては後者に属したといえるであろうが、青春を謳歌する学生生活を送り博士の学位を取得して大学教師を目指しながらも社会政治情勢の変化から叶わず、就いた新聞編集者を辞して以降は、無職のまま亡命生活を送りつつ研究と活動を続けることになる。その中で経済的に困窮し、貧困の苦しみを自ら経験したことは、支援を要請して幾度も送られたエンゲルス宛ての手紙などからもよく知られている。しかし近年の研究でも改めて言及されているとおり、マルクスが悩まされていたのは「多くの伝記作家が指摘しているように、

---

25) 猪木・勝田1967, 14.

家政婦や家庭教師を雇うなどといったヴィクトリア時代の中産階級的な生活を前提としたうえでの「貧困」<sup>26)</sup>に他ならなかった。

プルドンの場合、以上のような人々のいずれの類型とも大きく異なっている。前記したサント・ブーヴの伝記によれば、貧しい農民兼ビール樽職人の家に5人兄弟の長男として生まれたプルドンは、12歳にもならないうちから宿屋の食糧係として働き、篤志家の援助で通学し始めた高等中学校も、家計の窮乏などのために休まざるをえないこともあり、成績は良かったものの本は友人から借り、教科書は筆写するといった状態であった。そのような経済的に困難な状態は、たんに少年期のみならず、各地で印刷工などとして働きながら多方面に及ぶ独学を精力的に進めた青年期以降も、生涯にわたって続くことになるが、注目されるのはプルドン自身がそのことをどのように認識していたかであろう。その一端は29歳時に勧められてシュアール奨学金に応募するために記した申請書の草稿からもうかがえる。

「志願者である私は、労働者階級に生まれ育ち現在も将来も、心情や才能や言動や、そしてとりわけ利害と願望を共有していることによって、その階級に属しております。」<sup>27)</sup>

出自および現在がそうであるというだけでなく、将来も属しているという表現には、たんなる予想ではなく意志が示されているのではあるまいか。そのことは、幸いにも奨学金の受給が決定した後に友人P.アッケルマンに宛てた書簡で一層明瞭に示されている。つまり奨学金受給の決定について多くの人々から、プルドンがあたかも高位・高給を得たり、

26) 佐々木2016, 92.

27) Sainte-Beuve 1872, 31 : 訳書26.

名誉・栄達を遂げたりしていく——すなわち労働者階級から脱出していく——機会に恵まれたかのような祝福を寄せられたのを苦々しく思い、アッケルマンに対して、自分としては、むしろ次のように言ってほしいと記しているのである。それは、多くの人々が言うようにその階級から脱出するどころか、むしろ逆にその中で一つの役割を果たしたい、そのための力をつける機会にこそしたいのだ、という率直かつ強い意志あるいは決意の表明となっていよう。

「プルドン、お前は何よりも先ず、貧しい人々のために、下層民の解放のために、民衆の教育 [l' instruction du peuple] のために、為すべき義務があるのだ。……学問や富神プルトスの鍵を握る連中はお前を呪うだろう。しかし迫害や中傷や苦悩や死さえも通して、改革者の道を行け。……かつてイエス・キリストが神の子と呼ばれたように、お前は民衆の子 [enfant du peuple] だ。お前は多くの人間と同じく幸せになるために、お前の良心を捨て、信念を捨てるのか。お前の兄弟たちは、大きな目を開けてお前を見守っている。彼らは、彼らの保護者になってくれると誓った人間 [プルドン] の裏切りと失墜をまもなく嘆かなければならぬかどうか、心配しながら見守っているのだ。……」<sup>28)</sup>

サント・ブーヴは、こうした書簡類の文章を評して「プルドンの理論というものは、彼がここに示している感情の不動の岩盤に身を置くだろう。この観点からみれば、この29歳の彼にして全生涯の彼があるだろう」<sup>29)</sup>と述べているが、ここには本節冒頭で挙げた人々との立処の差異

28) *ibid.* 36 : 訳書31.

29) *ibid.* : 同前。

も示されているように思われる。

そしてそうした差異は第4節で触れたマルクスたちとの思想的な齟齬としても現れよう。例えば1844年9月にリヨンからパリに出たプルードンは、以後、マルクス、ルーゲ、グリユン、ゲルツェン、バクーニンなどと交流することになるが、マルクスやグリユンなどドイツの急進的思想家たちがプルードンに関心を寄せたのは、政治思想史研究者の金山準氏によれば、『所有とは何か』(Proudhon 1840)で一躍注目を浴びていたことに加えて、プルードンが厳しい教権批判を繰り返し無神論に近づいている存在と思われたからであった<sup>30)</sup>。政治革命を経ていないドイツのヘーゲル左派はラディカルな宗教批判に向っていたのに対し、当時のフランスの社会改革派は革命期の宗教弾圧の経験から概して宗教に親和的であったが、そうしたフランスの中であってプルードンは彼らにとって特別の意義を有する存在であったというのである。そして1843年にプルードンが公刊した『人類における秩序の創造』(Proudhon 1843)——そこで宗教は科学・進歩・道徳に敵対するものとして断罪され死すべきものとして厳しく批判されている——についても、「フランス国内では乏しい反響しか得られなかったが、その宗教批判ゆえにむしろグリユンらドイツの思想家が高く評価した」とされる<sup>31)</sup>。

しかしそうだとすれば両者、つまりプルードンとマルクス、グリユンたちヘーゲル左派との間で齟齬ないしズレが顕わになるのは、まさにここにおいて、そしてここからではあるまいか。

シュアール奨学金の申請や受給決定後の書簡類に示された自らの立处や役割に関する認識＝決意からするならば、宗教を死すべきものだとするような激しい批判や直截的な否定は、たとえドイツの急進思想家たち

30) 金山2015, 120.

31) 同前.

から喝采され共感を寄せられたとしても、肝心のフランス国内の民衆から「乏しい反響しか得られなかった」のでは、目的を果たしているとは言えず、接近法を早急かつ根本的に改めることこそ必要となろう。その3年後に出版された『経済的諸矛盾の体系または貧困の哲学』では、一転して巻頭に「神の存在の仮説」とそれに関する弁明的論述とを中心とする長大な「プロローグ」が置かれることになったのは、まさにプルードンの反省と接近法修正を示すものではあるまいか。

つまり金山氏が指摘されるように、かつての革命期の経験から当時のフランスの社会改革派が宗教に親和的であったのだとすれば、一般の民衆や労働者においてはなお一層そうであり、むしろ社会改革派の宗教への一般的な親和性はそうであることの反映でこそあって、人びとのそうした広範な親宗教的意識を外在的に厳しく批判し、端から神の存在を直截的に否定したとしても、民衆からは反発と拒絶反応が返ってきこそすれ、およそ好意的な反響が得られるはずもなく、自分の議論が受け入れられることには到底なりえないであろう。

この3年後の新著——そこでも著者の教権批判の思想は一貫して不変だとしても——が、本論たる体系本体とは明確に区別して大文字のローマ数字でページ付けした長大な「プロローグ」を設け、本論の主題とは一見無関係にも見えかねない「神の存在の仮定」に関して詳論しているのは、前著の反響の乏しさを省みて、奨学金受給の決定時に自ら銘記した立処と役割の認識＝決意を再確認し方法的に具体化するためでこそあったのではあるまいか。たとえそれがサント・ブーヴをはじめとする当代フランスの教養人や知識人たちの評価を得られなかりうと、そしてマルクスやグリュンたち——自らと同様の厳しい宗教批判と無神論への一層の接近を期待し確信していたであろう——ドイツのヘーゲル左派の急進思想家たちから反発を受けることにならうと、いわんや後代の研究者たちから難解で意味不明な「プロローグ」として忌避され、のみなら

ず本論までもが長く敬遠され無視されることになろうと、ブルードンにとっては民衆とともに民衆と同じ目線で……という立処と視座をあらためて確認すること、そしてそのような民衆意識において重要な位置を占める「神」の存在の仮定から議論を始めることは、不可避不可欠であつたろう。まさに「社会的事実についての歴史的・実証的な研究、社会の改良と進歩をめざす営みは、必ず民衆と同じ目線で [avec le peuple 民衆とともに] 神の存在を仮定せざるをえない」(ibid.: 39) ののであって、人びとが「その判断をのちに再検討することになる」ためにも、そこから始めることが方法的に必要であり肝要であつたのだろう。

しかしこうした「神の存在」の仮定は、そのように「せざるをえない」といういわば消極的な意味を担っているだけではない。それは同時に、実はきわめて積極的な可能性を開き用意することにもなっているように思われる。

人びとの集団的な交わり、社会的な生活経験の中から集団的自我として生まれ、社会的自我として内生的に形成され、広く民衆によって共有されるようになった普遍的理性、それが客体化されたものとしての「神」。ブルードンによればその普遍的な理性とその客体化としての神とが、人間社会という次元ないし位相をはるかに超えて、森羅万象を包摂し、宇宙全体を展望するようになるまでに人びとの思考世界を拡大し豊富化して「宇宙的自我」へと昇華させたのであつた。そのような普遍的=全宇宙的な理性であるものとしての「神」が、広範な民衆によって共有され、その内面に広く息づいているとすれば、そしてそれが——もし仮に長年の「客体化」を経て、さらにまた諸々の教義、教条、教説等の諸影響を受けて、乾涸び仮死化しているとしても——生き生きとその本来の命を蘇生させることができるとすれば、それは人びとと社会の——そしてその経済の——真に普遍的で自立的な秩序形成と活動と運行を、そしてそこへの改革と変革を方向づけ激励するものとなりえよう。

ブルードンの「神の仮説」には、そのような普遍的＝宇宙的な理性によって、森羅万象＝全自然を統べるのと同じの原理による人間社会とその経済の秩序形成と運行が可能になるとするような大胆かつ積極的な視界の展開が託されており、またそうした方向への民衆＝共同の自己練磨と科学的な内実充填とにおける自らの「教育」的役割の遂行の企図が込められているように思われる。そのことは本稿冒頭にエピグラフとして掲げた6種の文章のうち、本書の第1巻や第2巻からの2つの引用文に示されていると同時に、本論の経済学体系の到達点である第13章＝第10段階「人口」において「労働の増大 [l'accroissement du travail]」「労働の過重化 [l'aggravation du travail]」(t.2, 467: 訳書下巻547. 他) (=生産の過重化＝地球開発・搾取の過重化＝地球的自然と人間との不均衡化) に対する危惧が繰り返し表明され提起されていることにも示されているように。

全自然＝宇宙的世界における運動と均衡、その内部存在としての人間の社会と経済の運動と均衡、その社会経済と宇宙・地球・自然との均衡的な秩序と運行……この「プロローグ」で元枠＝大枠を設定された本書の経済学体系は、先述のような「民衆」的な視座からするこのような全般的均衡を展望し視界に納めた、その意味で真の自立とその上での協同＝連帯＝連合を目指すものであったように思われる<sup>32)</sup>。

---

32) そのように自立的に協同＝連帯＝連合する諸個人と諸社会、それらの内発的な組織化による全自然的・自然-社会間的・社会内的な諸均衡の全体的かつ動的な同時実現をこそ、ブルードンの全般的均衡論は志向していたのであろう。まさしく「この地球における人類の最終目的である……決定的な組織化を達成するために……われわれのあらゆる矛盾に関する一般の方程式 [équation générale] を立て」(t. 2, 527: 訳書下巻616) ようとしていたのであって、そのような視座と視界を有するブルードンの全般的均衡論からするならば、相互に関連する全市場の均衡の同時達成は——それが社会内の他の諸位相や自然-社会間や全自然的な諸均衡の全体的で動的な同時実現を伴っていない場合は——なお「一般均衡」とは言い難く、むしろ「部分均衡」または「特殊均衡」と言うほうが相応しいことになろう。



学的行程の出立点で示された先述のような認識＝決意は、本書「プロローグ」の「神の仮説」において、以上のような視座と視界の設定として具体化されているが、それはたんに本書にとどまるものでなく、生涯を貫くものになるであろうことは、エピグラフに掲げた残る4種の文章からもうかがえよう。それらは本書の12年後＝死の7年前に公刊された全4巻2,000ページから成るプルードン最大の著作『革命における正義と教会における正義』(Proudhon 1858)から引用したものである。その内在的な検討は別の機会に期すこととせざるをえないが、その大著が巻頭「民衆の哲学 [Philosophie Populaire]」と題して「哲学への民衆の登場 [Avènement du peuple à la philosophie]」から始められ、第5研究「教育」の第4章が「自然の中の人間 [L'homme au sein de la nature]」と題されていることも、上述の諸引用文とあわせて示唆的であるまいか<sup>33)</sup>。

---

33) なお民衆の中で民衆とともに民衆と同じ目線で……というのがプルードンの終始一貫した立処であり視座であることは、くり返し発禁処分を受けながらも『民衆の声』『民衆の代表』など「民衆 [Peuple]」を冠した新聞を刊行し続けたこと、下からの経済革命の中核となるべき「民衆銀行 [La Banque de peuple]」の実現と後処理のために奔走し続けたことなどにも現れていよう。また先の『体系』(1846)と上記の『正義』(1858)との間の時期にあたる1856年9月に、プルードンは、後に「ガゼット・ド・プロヌ」の編集長を務めることになるティユワ宛てに書簡を送っているが、そこには次のような一節がある。ここにも上述と同様の思想的視界の広がり語り出されているように思われる。「あなたと同様に、信仰の状態から哲学的正義へと移行する時に、私も良心の引き裂かれるような痛みを感じました。ですから、あなたの苦しみにも私も同情します。しかし考える必要があります。決して見失ってはならない原則があります。つまり宇宙の支配についてわれわれが形成する諸思想——その指導的思想は、すぐれた本質のそれであること、あるいは世界を構成する全ての原子の中に広がり潜在している本質のそれであること——最終的な分析において事物はよく配置されること。死も革命も信仰の喪失も愛の枯渇も悪ではないこと。それらを理解しえ、事物をその価値において判断し、それを一時享受し、均衡の不変な宇宙のように常に自分自身であり続けるやり方で、それを脱出する人間にとっては、それは一つの獲得なのであること、これです。」(Sainte-Beuve 1872, 231-232: 訳書316-317)

本稿が一次接近として検討してきた「プロローグ」、それを大枠＝元枠とする経済学体系は、たしかに難解でありその解読は容易ではない。しかし社会経済学の立処と展望する世界の広がり、その本来の視座と視界を再考する上で、長く閑却されてきたこの体系は貴重な手懸りを秘めているように思われる。

## 文献

- Ansart, Pierre 1967 *Sociologie de Proudhon*, Presses universitaires de France.
- 齊藤悦則訳『プルードンの社会学』法政大学出版局, 1981年.
- Marx, K. 1847 *La misère de la Philosophie. Réponse à la Philosophie de la Misère de M. Proudhon*, Belgique.
- 山村 喬訳『哲学の貧困』岩波文庫, 1950年.
- Proudhon, P.-J. 1840 *Qu'est-ce que la propriété? (What is property: an inquiry into the principle of right and of government, by P.J. Proudhon; translated from the French by Benj. R. Tucker. The Bellamy library, no. 23. 1898)*
- 新明正道訳『財産とは何ぞや』聚英閣, 1921年.
- 1840 *Qu'est-ce que la propriété?* (Œuvres complètes de P.-J. Proudhon, Marcel Rivière, 1926)
- 長谷川 進訳「所有とは何か」『プルードンⅢ』三一書房, 1971年所収.
- 1843 *De la création de l'ordre dans l'humanité, ou, Principes d'organisation politique.* (Œuvres complètes de P.-J. Proudhon, Marcel Rivière, 1927)
- 1846 *Système des contradictions économiques, ou Philosophie de la misère*, Tome 1 et Tome 2, Chez Guillaumin, Paris.
- 齊藤悦則訳『貧困の哲学 上・下』平凡社ライブラリー, 2014年.
- 1846 *Système des contradictions économiques, ou, Philosophie de la misère*, (Marcel Rivière, 1923 Nouv. Éd. 1, 2).
- 1848 *Le droit au travail et le droit de la propriété.* (Œuvres complètes de P.-J. Proudhon, t. 7. Libr. internationale, 1868)
- 小野重雄訳『労働権と財産権 連合主義論〈社会思想名著文庫〉』社会思想研究会出版部, 1949年.

- 1849 *Les confessions d'un révolutionnaire, pour servir à l'histoire de la révolution de février* (Introduction et Notes de Daniel Halévy, Marcel Rivière, 1929).  
山本光久訳『革命家の告白——二月革命史のために』作品社, 2003年.
- 1851 *Idee générale de la révolution au XIX[e] siècle*, Garnier frères.  
延島英一訳「十九世紀における革命一般の思想」『社会思想全集 第27巻』平凡社, 1931年所収.
- 1858 *De la justice dans la Révolution et dans l'Église: nouveaux principes de philosophie pratique: adressés a Son Éminence Monseigneur Mathieu, cardinal-archevêque de Besançon*. Garnier frères.
- 1860 *De la justice dans la révolution et dans l'Église: Essais d'une philosophie populaire*, Office de publicité, Nouv. éd.
- 1863 *Du principe fédératif et de la nécessité de reconstituer le parti de la révolution*, E. Dentu.  
江口 幹訳「連合の原理」『ブルードンⅢ』三一書房, 1971年所収.
- 1865 *De la capacité politique des classes ouvrières*, Rivière, Nouv. Éd. 1924.  
石川三四郎訳「労働階級の政治的能力」『世界大思想全集 16』春秋社, 1930年所収.
- Sainte-Beuve, C.-A. 1872 *P.-J. Proudhon: sa vie et sa correspondance, 1838-1848*, Michel Lévy Frères.  
原 幸雄訳『ブルードン』現代思潮社, 1970年 [1947年にAlfred Costesから再版された上掲書が底本とされている]
- Smith, Adam 1795 *Essays on philosophical subjects*, edited by W.P.D. Wightman and J.C. Bryce, Clarendon Press, Oxford, 1980.  
水田 洋他訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会, 1993年.
- Walras, L. 1860 *L'économie politique et la justice: examen critique et réfutation des doctrines économiques de M. P.-J. Proudhon*, Paris.

藤田勝次郎 1993『ブルードンと現代』世界書院。

長谷川 進 1977『甦るブルードン——その現代的意義を求めて』論創社。

猪木正道・勝田吉太郎 1967「アナーキズム思想とその現代的意義」『世界の名著 42 ブルードン バクーニン クロポトキン』中央公論社 所収。

梯 明秀 1936『社会起源論』三笠書房 (第2次大戦後, 『社会の起源』と改題して, 1949年に日本評論社, 1952年に青木文庫, 1969年に青木全書からそれぞれ出版された。1983年に

- 未来社から刊行された『梶野秀経済哲学著作集 第2巻』に所収)。
- 角田修一 2011『概説 社会経済学』文理閣。
- 金山 準 2015「『絶対』から『均衡』へ——前期ブルードンにおける私的所有批判の論理」『社会思想史研究』No.39。
- 北村洋基 2009『現代社会経済学』桜井書店。
- 河野健二 1987『もう一つの社会主義——マルクス・ブルードン問題の再審』世界書院。
- 河野健二編 1974『京都大学人文科学研究所報告 ブルードン研究』岩波書店。
- 編 1977=2009『ブルードン・セレクション』平凡社。
- 工藤秀明 2015「『持続可能な発展』とエコロジー 経済学の模索——史的システムとしてのエコロジズムへ」『千葉大学経済研究』第29巻第4号。
- 丸山真人 1996『社会経済学の展開』伊藤誠編『経済学史』有斐閣第9章。
- 御崎加代子 1998『ワルラスの経済思想——一般均衡理論の社会ヴィジョン』名古屋大学出版会。
- 2006『フランス経済学史——ケネーからワルラスへ』昭和堂。
- 2010『レオン・ワルラスの経済学史観——純粋・社会・応用経済学の起源』『彦根論叢 2010夏号』。
- 森川喜美雄 1979『ブルードンとマルクス』未来社。
- 森 政稔 2014『ブルードンとアナキズム——〈政治的なもの〉と〈社会的なもの〉』『岩波講座 政治哲学 3 近代の変容』第5章, 岩波書店。
- 大谷慎之介 2001『図解 社会経済学——資本主義とはどのような社会システムか』桜井書店。
- 大野節夫 1998『社会経済学』大月書店。
- 「緑丘」編集部 1967『手塚寿郎先生の追憶』「緑丘」編集部発行。
- 立半雄彦 1968『L. ワルラスの社会経済学』(大阪府立大学経済研究叢書, 第26冊)大阪府立大学経済学部。
- 斉藤悦則 2015『社会学者ブルードン』『日仏社会学会年報』第26号。
- 坂本慶一 1970『マルクス主義とユートピア』紀伊國屋新書。
- 1987『近代フランスの農業思想』世界書院。
- 坂田太郎他編 1966『フランス社会思想史文献目録——小樽商科大学所蔵手塚文庫目録』春秋社。
- 佐々木隆治 2016『カール・マルクス——「資本主義」と闘った社会思想家』筑摩書房。
- 佐藤茂行 1975『ブルードン研究』木鐸社。
- 鈴木 直 2016『マルクス思想の核心——21世紀の社会理論のために』NHK出版。

- 高草木光一 2015 「書評『貧困の哲学』上・下」『社会思想史研究』No. 39。
- 津島陽子 1979 『マルクスとブルードン』青木書店。
- 内田義彦 1982=1988 「私の心の奥に棲む存在——『梯明秀経済哲学著作集』——」『内田義彦著作集 第6巻』所収。
- 1985 『読書と社会科学』岩波書店。
- 1989 「後記」『内田義彦著作集 第8巻』所収。
- 宇仁宏幸他 2004 『入門 社会経済学——資本主義を理解する』ナカニシヤ出版。
- 八木紀一郎 2006 『社会経済学——資本主義を知る』名古屋大学出版会。

(2016年12月1日受理)

## Summary

---

### **The Viewpoint and Range of Vision in the Origin of Social Economics: A Primary Approach to the Neglected System**

Hideaki KUDO

For a long time in Japan, the world of economics has been divided into two lines of modern economics and Marxian economics, each of which is regarded as mainstream or orthodox, and as having developed independently. However, looking back to the origin, it turns out that both lines have important points in common. Two famous founders of those lines were self-proclaimed 'scientific socialists' aiming for social economics and at the same time began to form their own economics in earnest with the publication of books named exactly the same person as an opponent. And that person had recognized himself as a 'scientific socialist' and envisioned social economics before them. But the most important book in economics of that person has been neglected for all the time, because it was very difficult to understand and criticized severely by those two founders. In this paper, we analyzed the long "prologue" which is the key to the whole system of the book, and confirmed the important viewpoint and range of vision that had been forgotten in the history of economics, in the core of "a hypothesis of the existence of God"